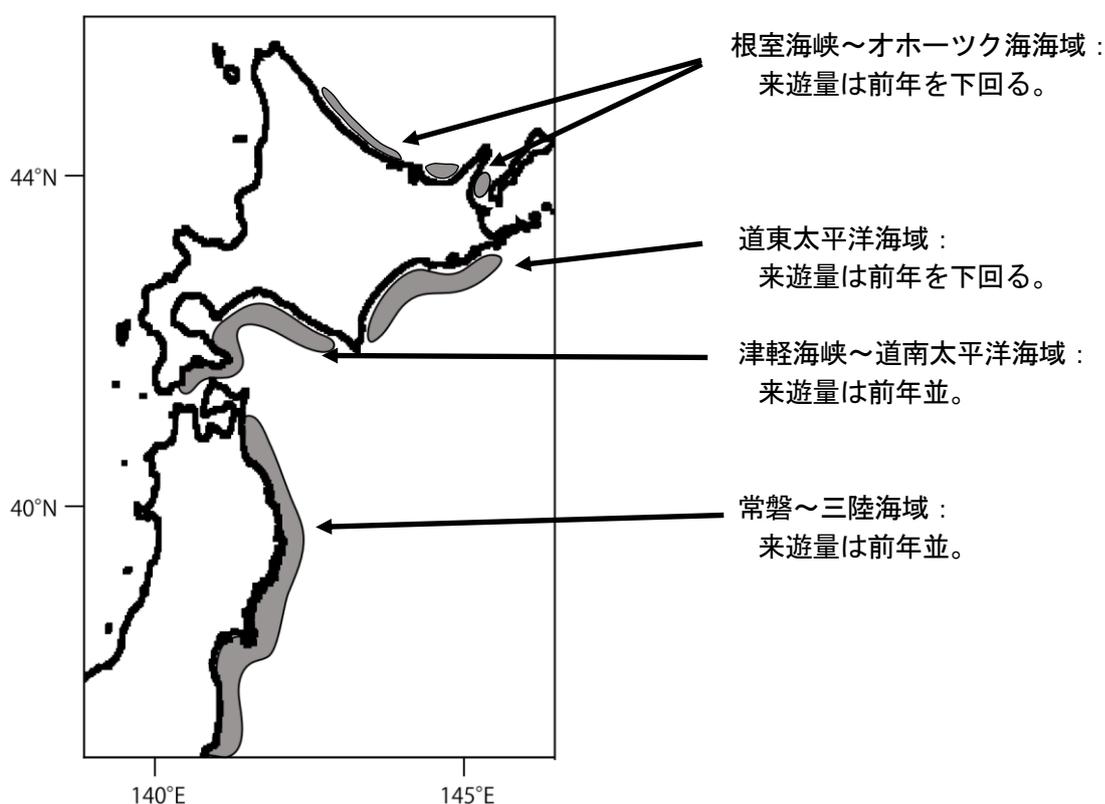


2022年度 第2回 太平洋スルメイカ中短期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し一般社団法人漁業情報サービスセンターがとりまとめた結果 －

今後の見通し(2022年11月)のポイント

スルメイカの来遊量は、道東海域、根室海峡～オホーツク海海域では前年を下回る。
津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域は前年並。
海域別の予報については以下の通り。



問い合わせ先

一般社団法人漁業情報サービスセンター 水産情報部
担当：渡邊、緑川
電話：03-5547-6889、ファックス：03-5547-6881
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.jafic.or.jp/informetion/category/news/>

国立研究開発法人水産研究・教育機構
<http://abchan.fra.go.jp/>

2022年度 第2回 太平洋スルメイカ中短期漁況予報

今後の見通し（2022年11月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海海域、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2022年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：明瞭な主漁場が無いまま終漁する。

2. 根室海峡～オホーツク海海域（いか釣り、定置網、底びき網）

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：明瞭な主漁期が無いまま終漁する。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

(1) 来遊量：前年並。

(2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

(1) 来遊量：前年並。

(2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。

I 予報の説明

第2回太平洋スルメイカ長期漁況予報の公表後の漁況の経過等を主要な情報として、11月におけるスルメイカの来遊量を予測すると、道東太平洋海域と根室海峡～オホーツク海海域では前年を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域と常磐～三陸海域では前年並と考えられる。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 道東太平洋海域

この海域に来遊する漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群と考えられる。2022年8月～9月に実施した太平洋第2次漁場一斉調査と道東太平洋スルメイカ資源調査*の結果によるCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は道東周辺海域では漁獲がなく、前年（0.06尾）を下回った（図1）。また釧路以東（144.4° 以東）でも漁獲がなく、前年（0.02尾）を下回った。

本年8月中旬～9月下旬は花咲港と厚岸港で釣りの水揚げがあったが、釧路港では釣りの水揚げはなく沖合底曳網のみの水揚げであった。花咲港と厚岸港の漁獲量は前年を大きく下回り（前年363.6トン、本年49.0トン）、CPUEも前年を下回った（前年0.38トン/隻/日、本年0.14トン/隻/日）。10月上旬～中旬における花咲港と厚岸港の釣りによる漁獲量は36.5トンで、前年同期は漁獲が皆無であった。なお、釧路港では小型いか釣りによる今期の漁獲は皆無であるが、沖合底曳網で本年9月は277.2トン、10月上・中旬は合計130.6トンと前年同期を上回った（前年9月0.4トン、前年10月0トン）。

これらのことから、10月の道東太平洋への来遊量は低調で、沖合底曳網では漁獲があるものの、全体では前年を下回ると考えられる。FRA-ROMSII **による11月の予測水温（図2）では道東海域は親潮第一分枝が差し込みを強め、道東海域は三陸沖の北上暖水が離岸していることから魚群がまとまらない海況と考えられる。

以上のことより、11月の道東太平洋への来遊量は前年を下回ると予測される。また漁場形成は散発的となり、11月で終漁となる。

*北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。

**国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム（FRA-ROMSII）による予測水温（<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>）

2. 根室海峡～オホーツク海海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。羅臼港における10月上旬～中旬の小型いか釣り漁船による漁獲量は前年を下回り（前年63.1トン、本年9.3トン）、CPUEも前年を下回った（前年0.29トン/隻/日、本年0.20トン/隻/日）。一方、釧路以東（144.4° 以東）でのいか釣り調査では漁獲が皆無であった。11月の予測水温（図2）はオホーツク海では平年よりも高めであるが、羅臼港の10月の水揚げ状況やいか釣り調査結果等から、11月の根室海峡～オホーツク海海域への来遊量は前年を下回ると考えられる。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。太平洋第2次漁場一斉調査のCPUEは1.6尾で、前年（1.9尾）並であった（図1）。

10月上旬～中旬における小型いか釣り漁船による漁況は、以下の通りであった。大畑港における漁獲量は、前年を下回り（前年10.8トン、本年0.69トン）、CPUEは前年を下回った（前年0.15トン/隻/日、本年0.01トン/隻

/日)。函館港における漁獲量は、前年を下回り(前年 5.9 トン、本年 1.1 トン)、CPUE も前年をやや上回った(前年 0.04 トン/隻/日、本年 0.09 トン/隻/日)。浦河港における漁獲量は、前年を上回ったが(前年 0.3 トン、本年 17.2 トン)、CPUE は前年を下回った(前年 0.31 トン/隻/日、本年 0.15 トン/隻/日)。

大畑港、函館港、浦河港の全体で見ると、漁獲量は前年を上回ったが(前年 17.0 トン、本年 28.6 トン)、CPUE は前年並であった(前年 0.08 トン/隻/日、本年 0.08 トン/隻/日)ことから、10月上旬～中旬における当海域への来遊量は前年並～上回ったと考えられる。一方、前述の通り、10月上旬～中旬の道東海域への来遊量は前年を下回ったと考えられる。そのため、11月の津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される。

4. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。太平洋第2次漁場一斉調査では常磐～三陸海域では漁獲がなく、前年(0.03尾)と同様の低い分布密度であった(図1)。

10月上旬～中旬における小型いか釣り漁船による漁況は、以下の通りであった。青森県の白糠港、泊港、三沢港、八戸港における合計漁獲量は前年を上回ったが(前年 15.7 トン、本年 39.3 トン)、CPUE は前年を下回った(前年 0.11 トン/隻/日、本年 0.07 トン/隻/日)。岩手県主要7港における漁獲量は、前年をやや上回り(前年 3.4 トン、本年 3.9 トン)、CPUE も前年をやや上回った(前年 0.034 トン/隻/日、本年 0.046 トン/隻/日)。宮城県(石巻・気仙沼・女川・志津川)の小型いか釣り漁船による漁獲量は、前年を下回ったが(前年 0.491 トン、本年 0.19 トン)、CPUE は前年並であった(前年 0.014 トン/隻/日、本年 0.015 トン/隻/日)。青森県白糠港～宮城県石巻港全体における小型いか釣り漁船による漁獲量は前年を上回ったものの前々年の2割に減少し(前々年 252.4 トン、前年 19.6 トン、本年 43.4 トン)、CPUE は前年並だった(前年 0.069 トン/隻/日、本年 0.067 トン/隻/日)。

これらのことから、10月上旬～中旬における当海域への来遊量は前年をやや上回ったものの、前々年から大きく下回ったと考えられる。また、前述の通り、10月上旬～中旬の道東海域への来遊量は前年を下回ったと考えられることから、道東太平洋から本海域へ来遊する南下群も前年より期待できない。以上のことから、11月の常磐～三陸周辺海域への来遊量は前々年を大きく下回り、前年並と予測される。

II 各海域の漁況経過(8月～10月中旬)

2022年8月～10月中旬の宮城県以北の太平洋沿岸主要港でのいか釣り漁による水揚量(生鮮:速報値、一部未集計)は1020.0トンで、前年(488.7トン)を上回ったものの、2020年8月～10月中旬の2,243トンから半減した。以下各海域別のいか釣り水揚量を示す。

1. 道東太平洋海域

道東4港(十勝港、釧路港、厚岸港、花咲港)における2022年8月～10月中旬の合計水揚量は85.5トンで、前年(363.6トン)を下回った。旬別の漁況の経過を図3-1に示す。

2. 根室海峡～オホーツク海海域

羅臼港における2022年8月～10月中旬の合計水揚量は10.8トンで、前年(130.9トン)を下回った。旬別の漁況の経過を図3-2に示す。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域

大畑港、函館港、浦河港における 2022 年 8 月～10 月中旬の合計水揚量は 134.5 トンで、前年（234.3 トン）を下回った。旬別の漁況の経過を図 3-3 に示す。

4. 常磐～三陸海域

青森県（白糠港、泊港、三沢港、八戸港）、岩手県（主要 7 港）、宮城県（気仙沼港、石巻港、女川港、志津川港）における 2022 年 8 月～10 月中旬の合計水揚量は 1,020.1 トンで、前年（488.8 トン）を上回ったものの、2020 年 8 月～10 月中旬の合計 2,243 トンの半分の水準に留まった。旬別の漁況の経過を図 3-4 に示す。

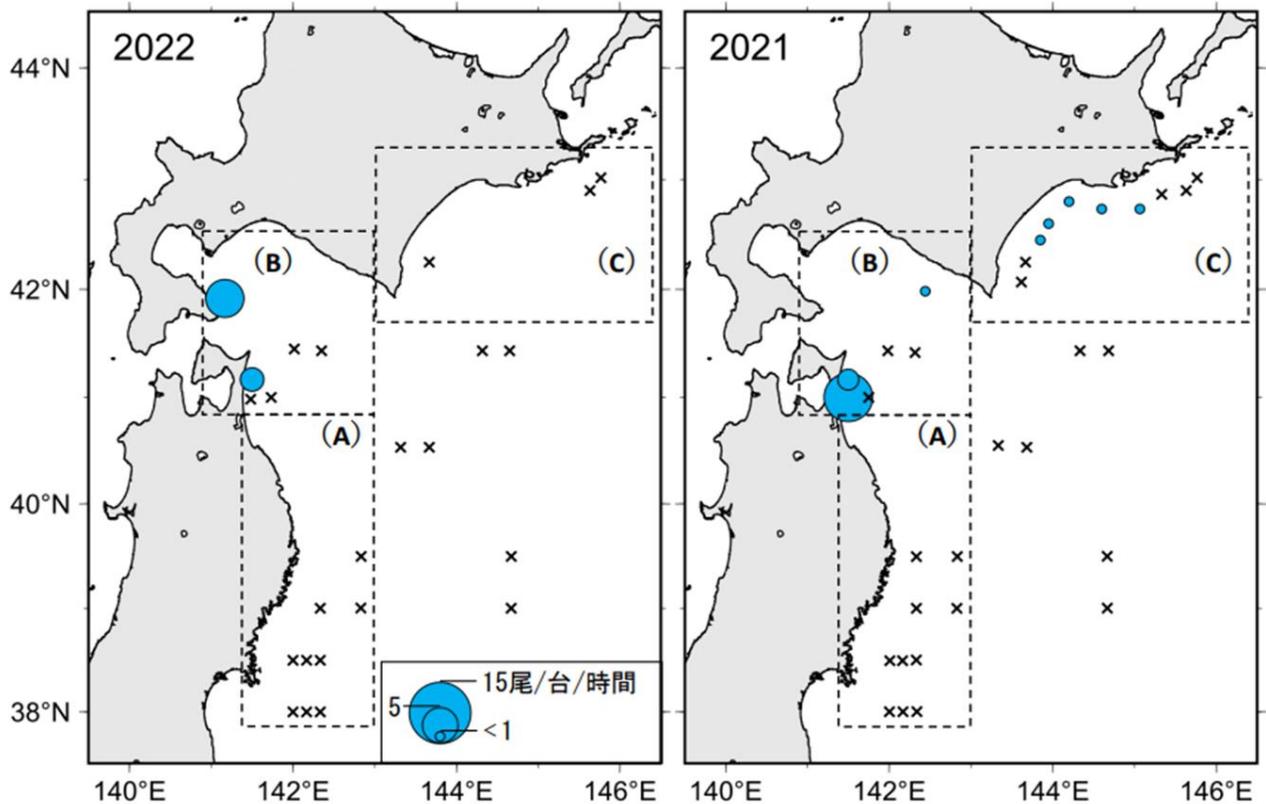
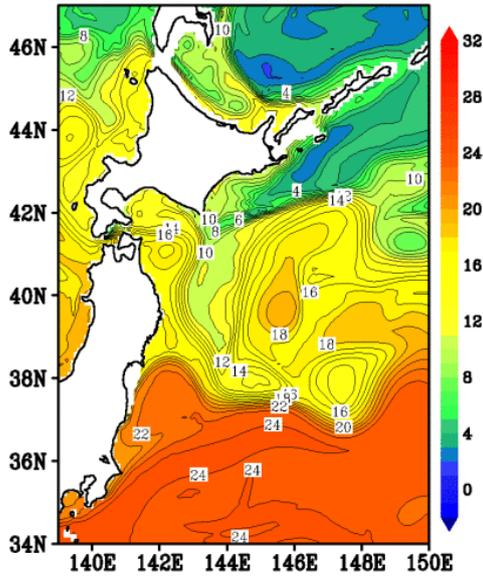


図1. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り1台1時間当たり漁獲尾数）
 2022年8月～9月（左図）、2021年8月～9月（右図）のいか釣りによるスルメイカ
 のCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたが
 って示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、
 （B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホー
 ツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す
 （2022年 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報より抜粋）

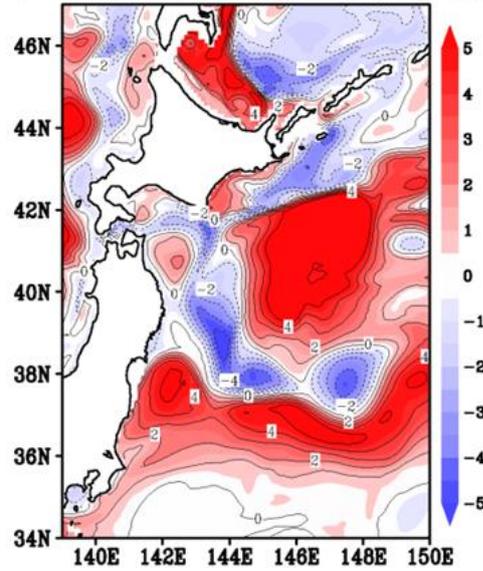
FRA-ROMS II

2022/11-early Temperature[°C] (50m)



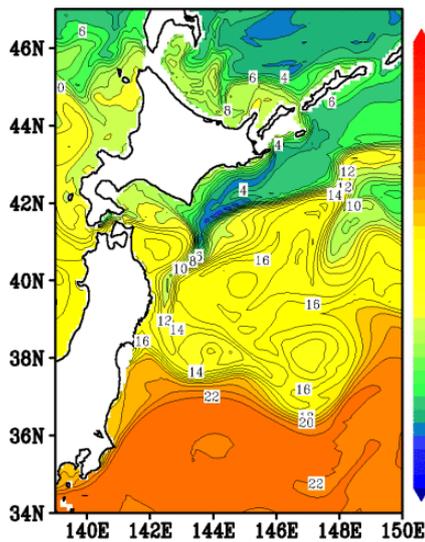
FRA-ROMS II

2022/11-early Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)



FRA-ROMS II

2022/11-late Temperature[°C] (50m)



FRA-ROMS II

2022/11-late Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)

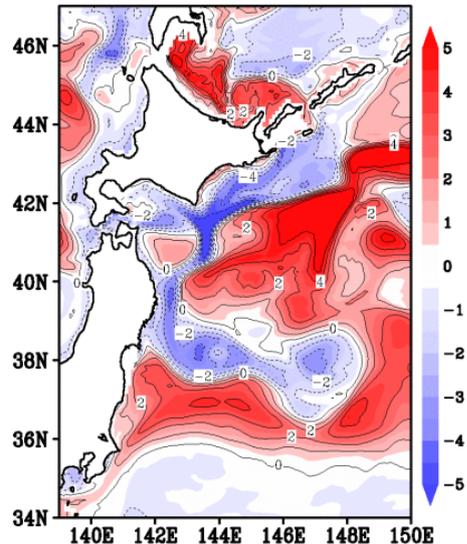
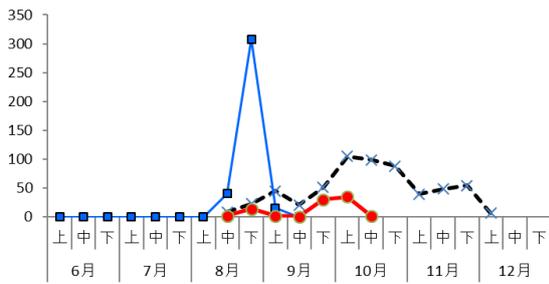


図2. 海況予測システムFRA-ROMS IIによる2022年11月上旬（上段図）と下旬（下段図）の50m深予測水温（左図）および平年差（右図）（10月24日時点）

注：50m深はスルメイカの代表的な分布深度

漁獲量(トン)



CPUE(トン/隻)

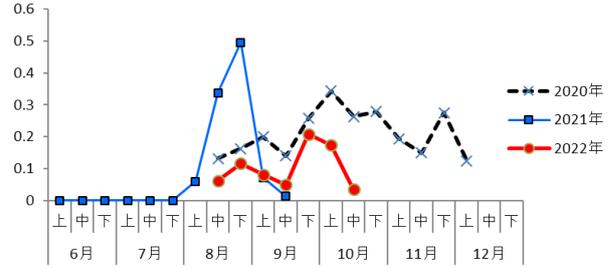
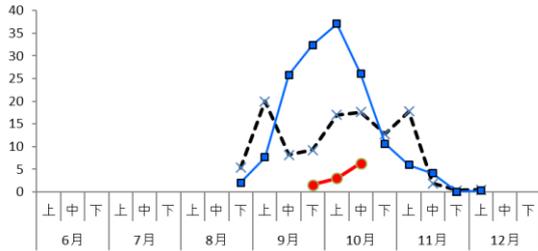


図3-1. 道東太平洋海域の主要港におけるスルメイカ釣りによる旬別漁獲量（生鮮）とCPUE

漁獲量(トン)



CPUE(トン/隻)

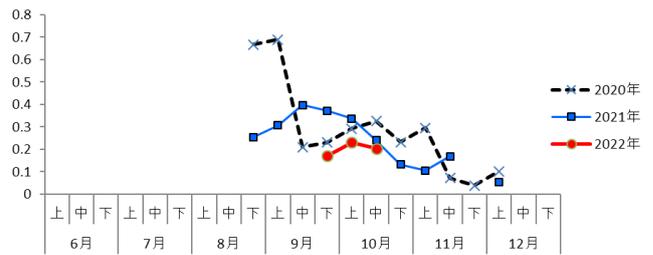
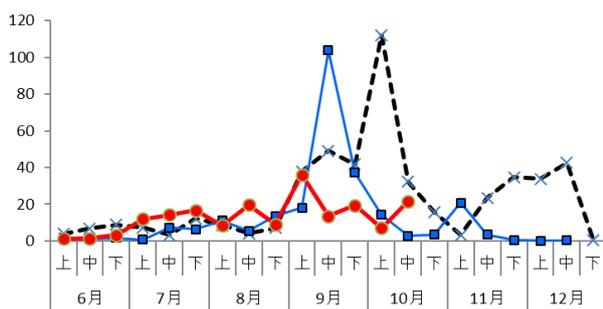


図3-2. 根室海峡～オホーツク海域の主要港におけるスルメイカ釣りによる旬別漁獲量（生鮮）とCPUE

漁獲量(トン)



CPUE(トン/隻)

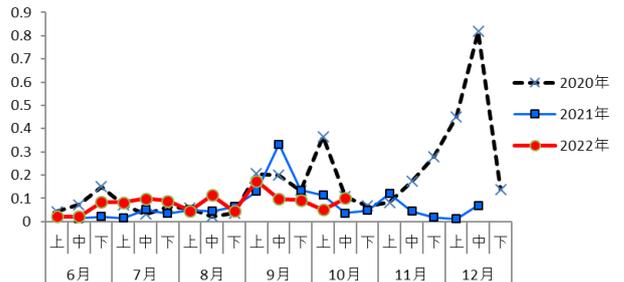
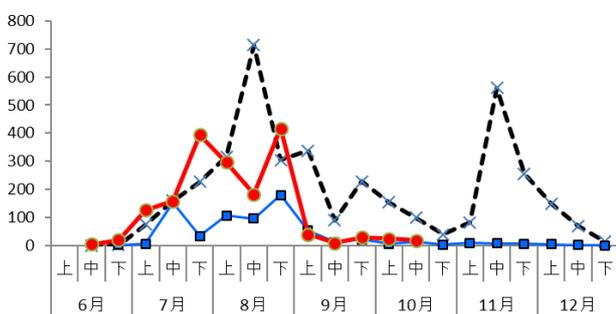


図3-3. 津軽海峡～道南太平洋海域の主要港におけるスルメイカ釣りによる旬別漁獲量（生鮮）とCPUE

漁獲量(トン)



CPUE(トン/隻)

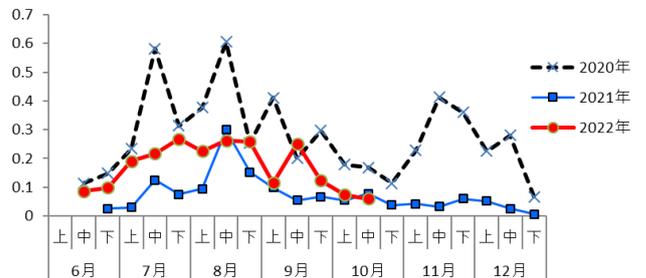


図3-4. 常磐～三陸海域の主要港におけるスルメイカ釣りによる旬別漁獲量（生鮮）とCPUE

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p> <p>岩手県水産技術センター</p> <p>宮城県水産技術総合センター</p> <p>福島県水産海洋研究センター</p> <p>茨城県水産試験場</p> <p>千葉県水産総合研究センター</p> <p>神奈川県水産技術センター</p> <p>静岡県水産・海洋技術研究所</p>	<p>三重県水産研究所</p> <p>和歌山県水産試験場</p> <p>高知県水産試験場</p> <p>国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p> <p>(取りまとめ機関) 一般社団法人 漁業情報サービスセンター</p>
--	---